

この新聞広告で、冬の八甲田山での取材を思い出した。



真冬の青森取材二題

中村 登紀夫

(TBS・WOWOW)

▼八甲田北東麓

一夜で膝も埋まる雪が

「八甲田を見たことは一切囁つてはならない」
「明治35年、冬の八甲田山に起きた悲劇」
「映画化不可能と言われた不朽の名作」
「シネマコンサート」が今冬

者に与えられたという。

市役所を訪ねた。教育長という

人が応対、あなた方だけではムリ、
案内を兼ねて冬山に強い職員をつ

ける。羊羹を一人分で二本買ひな
さい、私は冬の満州を知つてゐる。

もしものとき、羊羹一本で一日は
生きられる。

翌日、ジープには、見るからに
屈強そうな若い職員が待つていた。

山麓への道も雪がない。一時間余
りで車を降りると、「これから先

は歩きます」、開拓部落への道の
角に避難小屋らしい家がある。

デンスケは助つ人の職員が肩に
担いでくれる。一時間余り歩く。

明治の八甲田雪中行軍遭難の碑が
あつた。悲劇が嘘のようだ。空は
晴れ、雪はない。

昭和32年12月、3キロのデン
スケを担いで、山林アナウンサー
と青森駅に降りると、この冬、街
に雪がなかつた。

人生の放送 私の

●遭難の碑を過ぎて
日本一貧しい開拓部落へ

ラジオ東京、毎朝の15分番組
『ラジオスケッチ』の取材だった。

八甲田山麓の田代平に日本一貧
しい開拓部落がある。戦後の引揚

者に与えられたという。

市役所を訪ねた。教育長という

人が応対、あなた方だけではムリ、
案内を兼ねて冬山に強い職員をつ

ける。羊羹を一人分で二本買ひな
さい、私は冬の満州を知つてゐる。

もしものとき、羊羹一本で一日は
生きられる。

翌日、ジープには、見るからに
屈強そうな若い職員が待つていた。

山麓への道も雪がない。一時間余
りで車を降りると、「これから先

は歩きます」、開拓部落への道の
角に避難小屋らしい家がある。

デンスケは助つ人の職員が肩に
担いでくれる。一時間余り歩く。

明治の八甲田雪中行軍遭難の碑が
あつた。悲劇が嘘のようだ。空は
晴れ、雪はない。



満州での富士見村開拓団

必ずしも農業が得意ではない。
しかも冬の寒さは厳しい。

この開拓地の人がどこの引揚か
は記憶にないが、与えられた土地
の開拓が相当に苦しい毎日だった

ことは確かで、話は夜遅くまで
続いた。「もう、休みましょう」

と付添が気を使つて、ではまた明
日と床につくころ、「雪が…」と

声が聞こえた。

●陽が傾き、雪が舞う道を

翌朝、戸を開けると膝が埋まる
ほど雪が積もり降りつづいている。
だが、まだ話の続きがあつた。

昼過ぎ、案内の山男が厳しく命
令した。「もう終わつてください、
この雪です。来たときは違う、
あなた方が、どのくらい歩けるか、
急いで」、開拓地の人に挨拶をし
て外へ出る。雪は膝を超えていた。

取材服の下は厚着をしているが、靴は、この雪に耐えられるのか。

山男が冬山の危険を頭に叩き込ませた。「林の中は雪が舞うこと

がないので比較的安心ですが、灌木が続く道は、風で枝に積もつた雪が舞うと前が見えなくなります」

大柄な彼は積もる雪を踏み分けしていくが、ついていくのが大変。

来たときは2時間余りだつたが、ジープまでどのくらいで着くのか、道半ばと思われるころ、「ジープが待つてくれるか、先に行きま

す。私が雪を踏んだ跡を歩いて来て」だが、大柄な彼の踏み跡には足が届かない。特に山林アナは小柄だ。彼の姿が見えなくなつた。何とか足跡についていくと灌木の道に：雪が風に舞う。一瞬、視界が消え、小鳥がチツ、チツと鳴いて私たちについてくる：あの鳴き声は今も耳に残つてゐる。

彼にどのくらい遅れたろうか、やつと着く。ジープがいた。「予定は3時までということでしたが、6時まではと待ちました」、山男の足で6時直前に間に合つたのだつた。ジープに座る。暖かい、助かつた。下まで1時間。7時ぎりぎりに

市役所の玄関に着くと、教育長をはじめ大勢の職員が「バンザイ」と手を挙げた。

●あわや、遭難救助隊が！

教育長にお礼を言うと、もし、7時までに帰らなかつたら遭難救助隊が出動することになつてゐた。実は昨日、警察署長にあなたの方の話をした。署長が「どんでもない、あの雲を見て、今夜は雪だ、山の経験ないラジオ東京の人を、なん

てことを」、遭難救助隊を待機させた。

八甲田死の行進が脳裏をよぎつた。案内の彼も一緒に宿に帰り風呂に浸かると生き返る気分。山林君には悪いけど、彼も一緒の夕食の熱燗が最高に美味かつた。

▼陸の孤島 竜飛へ

一日おいて、「帰れなくなる。

役場に答えはなかつた。バス会社は「あつちでトラックに聞いて」。トラックも「龍飛はいかねえ」：万策尽き、あきらめるほかないか。ここまで来て悔しかつたが、駅前のラーメン屋に入つて温かい汁を吸つたとき、戸をガラリと開けて男が来た。「龍飛行きたつてのは、あんたらか」：「そうだよ」一オレのタクシーで、行けるところまで行つて、あと歩くなら、すぐに行くが」「頼むよ。で、帰

●行けるところまで行く

あとは歩け

三厩まで津軽便鉄道で行く。吹雪が客席まで舞い込んできた。

役場に寄る。龍飛のこと、岬への交通手段などを聞く。

龍飛は、冬、陸路が閉ざされ、波荒い津軽海峡は船も運航できず、青森から、食糧など生活物資も届かない陸の孤島で、春には野菜もなく、野草を食べることもあると

いう。竜飛崎まで、どうやつて行くか、役場に答えはなかつた。バス会社は「あつちでトラックに聞いて」。その先、どれほど歩くのか。どのくらい乗つたのか。道に雪はない。が、車が停まる。「もうここまで」、

●こんな冬に

濱谷さん以来、初めて

陽が落ちて車窓の右に津軽海峡の荒波が：行けるところまで行つて、そこまで乗つたのか。道に雪はない。が、車が停まる。「もうここまで」、「ここから龍飛まで、どのくらい三里くらいかねえ」。

海沿いの道は狭く、津軽の海の塩吹雪が凍えそうな身体に吹きつける道を、デンスケを担いで三里か、泣きたい。

車が通れないのは、夜、荒波を避けて陸揚げされた舟がずらりと並んで道を塞いでいるからだつた。この辺りの集落は岸からすぐの

(甲) A.1	13000	F
昭和37年1月2日	高野謙	473
時 間	12時50分から	午
時 時	30分まで	午
新 路	BS-東一	860
乗組員		一
使 用		
的		

(1) 各項目記入の上押印を乗用車販賣店販賣者へ提出して下さい。
(2) 印は必ず二つ折にして貼り下さって下さい。
(3) 金額の訂正は原則として認めません。

東京旅送

絶壁にへばりつくように家がある。

道に並んだ舟の舳先と玄関の間は

30センチくらい。車どころか歩く

のも大変。デンスケを落とさない

よう舟の舳先を慎重にまたぐ。

いくつかのこうした集落の間は

暗い道になる。海鳴りと暗黒な海

にそりたつ奇怪な形の岩が空恐

ろしい。所々短いトンネルもあり、

抜けると遠くに竜飛灯台の光が見

え隠れするが、歩いても歩いても

光に近づかない。

何時間歩いたろう。竜飛だ。

池谷旅館という宿がある。萩元

晴彦さんが、以前、竜飛取材を考
えていたのだろう、濱谷浩さんの
名刺に書いた紹介状があり、それ
を貰っていた。真冬の突然の客に
おかみさんが驚く、「こんなとき
来たのは、濱谷浩さん以来、初め
て」。

とにかく温かくなりたい。熱い
もの食いたい。かけうどんが今まで
食べたことないほど美味かつた。
一晩明けて、まず灯台へ、津軽と
日本海を航海する船舶の命の灯台。
苦労話を聞いたあと、電話を借り
て社に連絡、「竜飛に来ちゃいま
した」「ええ、気をつけて帰つて
こいよ」

●ジャガイモの主食

古代と変わらぬ漁撈

濱谷さん『海は咬みつくような

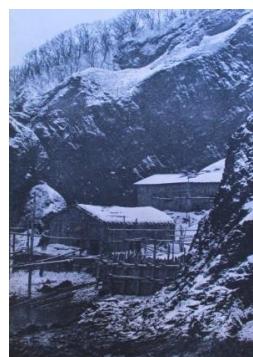
波をもつて襲いかかる。岩と、波

と、風と、雪の、凶暴なこの地に

も、人は部落をつくつた。人間も、

家も、船も、必死になつて、この

狭い土地にへばりついている』



●行つた人しか分からない

何年後か『朝の談話室』という

番組が濱谷さんの話を録るという

ので同行した。

『裏日本』の竜飛の写真は、みな

鮮やかなモノクロではない。青み

がかつた、ややかすんで、決して

きれいとは言えない。「なんで、

こんな薄青い汚れた色にしたん

だ」、写真仲間には酷評されたと

言う。「でも、竜飛の景色も空も

この色でした」、「そうでしよう。

行つた人にしか分らない」と濱谷

さんは喜んでくれた

今まで來てくれた。青森までの帰

り道、義経寺を案内してくれた。

義経は平泉からここまで逃れ、三

廻から蝦夷に渡つたという伝説の

寺だ。また、すでに、青函トンネ

ル試掘のための海水をくみだして

いるところがあつた。

●田代平、竜飛、その後

田代平は、一時、温泉別荘地に

なつたと聞いたが今は廃れている

とか。

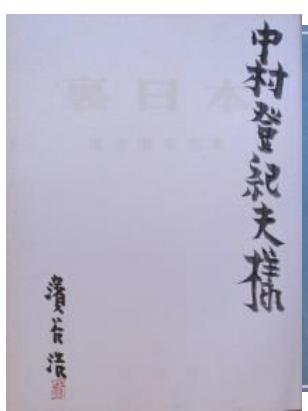
後、竜飛には平成に入つて2度

行つた。今は山沿いに道があり、

「いける所」に竜飛がある。もう、

池谷旅館はない。

後、竜飛には平成に入つて2度
行つた。今は山沿いに道があり、
「いける所」に竜飛がある。もう、
池谷旅館はない。



二日後の昼過ぎ（行けるところ
まで）のタクシーは、陸揚げされ
た船も少なく20分ほど歩くところ

まで來てくれた。青森までの帰
り道、義経寺を案内してくれた。

義経は平泉からここまで逃れ、三

廻から蝦夷に渡つたという伝説の

寺だ。また、すでに、青函トンネ

ル試掘のための海水をくみだして

いるところがあつた。

（竜飛の写真は『裏日本』から）